

和田節定編輯

開明小說

春雨文庫

第六號

下



A416
12

春雨文庫第六編卷之下

東京 和田定節著

○第二十三回

花はなの爛らん慢まんたるも見と様やう不ふ因いんてハ無む常じょうの感かんと發はつ
 月つきの麗れい朗らうたるも心こころふ愁うれへあるとさハ哀あれと誘さそ
 ふ媒ま妁ごうとやるらんお梅うめハ吉きち太た郎らうよりの便べんり哉や
 得えず嬉うれしさ限かぎり無なく使つかひの若わか者と饗あ食じき應おう一いつ京きやう都との
 容ゆる子すと詳くしく聞きんと為せしふ今こん夜や中ちゆう不ふ是ぜ非ひとも

江戸へ往ねば成らぬとして尻我落着ぬ由酒代と
與えて是と歸せし後いざぎりの包とと奥の小
座敷へ持ちき燈火の下ふ油紙と解不びし先書状
を開きく見るふ世の中へ何となく騷々しけれど
も日々潔よく勤て居り同役の人々おひく家内と
引纏めをむ折と見合せ呼迎へふ下るとの事が細
々書てあり且西陣ふて云々の品と求めたを心送
るとの相も愛らぬ艶しさへ身ふ染渡る嬉しさ

と包むふ餘る帶地髪かけ繻絆の袖口半襟ふ時
分とぬ春の花秋の紅葉と宛然ふ敷散したる如
くまり然とむお梅の梅の色の美しさと打る
がめまゝと吉太郎の厚き意と思ひ夢心地ふく有
りけるが不斗氣が伝き帶地の切とてふ採りく
溜息をるがごとく紺地の本國ありへ蘭の模様と織
出しと誰ふ見せても寸対の無品なれど世の中
が騷々しいの下京都へ護衛ふお出の吉太郎さん

のち身不取と本國ありの蘭の模様が本國の亂と
變り再び江戸や横濱へいこん地と言ふ辻占う
と思察る心不案トて見ると繻絆の袖口や髪か
けの切の鍔砲絞りキシヤゴ絞りも互ひ不撃あふ
鍔砲あがり槍と接ゆる騎者伍あがり不成へ仕
舞うとき不掛り又去の半衿の淺黄地不朝顔と
秋の蝶の縫とり模様朝が不の敢果あいのをの
限り又比へ秋の蝶の翌日をも知れぬト言かけホロ

りと泪を翻しつ差し伏むいて居るうしが思ひ忘
れ様としく表と詠めねて居て待つ果報ううの増
て嬉しい京都の便り不此種々と戴いとい勿体あ
とも有がらゝいとも不禮の申し様へるい程なれど
今日の嬉しいお送り物が後の悲しい辻占の知らせ
不成りへ為まいろと思ふと此おて紙不書て被遣
の通り一刻も早く近ひのお下り不るり御一所
不京都で暮したら仮令その地不戦争が始ま

り兵糧のお握飯や草鞋の紐のお世話と一若
一萬一の事が有る此身も共死で仕舞女の
道へ立るるれど何と言ふも懸隔ッて居るむり
りで無く未ど表向き親と親と不許されと夫婦
で無かう誰やらの歌ふ羨やま一人目なき野のき
りぐに鳴も心の儘あゝぬ身へと有通り嬉し事
が有ればあるで悲しい思ひのまゝて来る鳴虫と
やらみ取り附きでも為とのりと彼を思ひ是を

案ト涙み濡る袖を啖と獨り愁然たりける折
から廊下み破多き足音してアお梅さんへ
先刻から何處へ隠れん坊と一仕舞とのりと
思つとら此處み閉籠りまゝと京都の事を考え
塞ぎの虫てお出るさるゝと言ひるぐ入り口の
障子を明るお松の姿お梅の早く書状と隠し
アお松さんお忙がいふも構はず此様るとこ
ろみ逃込んぐ居てお氣の毒さる然ッア一寸御



覧らんるささの京きやう都との染せんの綺き纏ちんみことこと一松ホホニニままアア美うつくしい
絞しぼりりでで有ありりますます移うつりり然しかししここ此こ帯おびの宜よろししききとと是これれがが真ま正じやうの
澁しぶいいとと言いふふののどどのの夫おとこももままアア半はん襟えりの意い気きるる事こと定さだめ
一一彼かのの人ひとかからら下くだせせううがが美うつくまましいしいぢぢややアア有ありりまませせんんう
何い様さまままりりややアア渡わた邊へさんさんのの此こ様さまもも實じつがが有ありりてて優やさしい
どどららううトトおお梅うめのの顔かほとと見み詰つめてて居ゐるるおお梅うめのの泣な顔かほととお
松まつみみ見みせせどどとと明ありりなな斜しやみみ身みととそそむむけけアアレレ香かど
よよノノ珍めづららしいしいもも無む顔かほととササ一一夫おとこででもも渡わた邊へさんさんがが何い

處このの愛あい敬けいみみ惚ほととううとと思おもつつててササ一一又またおおいいぢぢめめどど夫それ
どどがが子こ矢や張ちやう太たのの品しなのの渡わた邊へさんさんかかららおお遣よこすすののどど
帯おびへへおお宅うちへへ届とどけけてて上あるるののどどがが半はん掛かやや袖そで口くちへへおお松まつさ
んんややおお竹たけさんさんふふもも上ありりてて呉くれろろとと言いつつてて被あ遣こののどどかから
中なかかよよくく分わかかてて戴かぶりりまませせうう移うつりりトト聞きききおお松まつのの荒あ示ししし
顔かほ一一おお梅うめさんさん真ま正じやうふふささううママ嬉うれしいしいねねへへトト鼠ねず鳴なきき
くく折しやりりここのの小こ用よう所しよへへ往いるる酩め酊てい客きゃくがが廊らう下かとと通とほりりななががら
一一昔うまくく遣よこすすややアアががるるぜぜ畜ちく生せいめめ

○東福寺の鐘かねの丑刻うしごけを打切り四邊あちうやうやく寂せき
漢またる時とき入り口くちのどを瓜うりの先さきりて竊ひそりふトシくと
押おけべ内うちより「唯ただと言いつ立出たちいで掛鎖かざ外そとへ戸とを
細こめふ明あけけ「且また那なでござい升しやうりと小聲こごゑで言いべ「應うん
自おの己のどとの答こたへも竊ひそりに其方そち此方こち見みまへ内うちへ這た
入いりて戸と締とり做まし上ありるがう「今日けふの餘あまり遅おそくる
りし而已のみならず世よの中ちゆうも煽動せんどうの火ひのてが強つよいの
で段々だんだん沸騰ふいとうツと来きとから来こめへと思おもつとが其事そのこと

を心得こころえさせて置おてへの下ちゆうと一寸いちゆん抜ぬて来きとのど酒さけの有あり
「万ひやうと一いつとお往いり有ありうと存ぞんトお支度しどと為なして置おま
とから直すふお爛らんを附つませう「开ひてやア有ありがて「然しかが
お鍋なべへ眠ねり込こんどるゝ寐ねとまゝふして置おが宜いとふ
へ召使めいしひの下女げおよのどるるべし又また此處こゝふ来きりしへ新撰しんせん
組ぐみの頭かみ近藤こんどう勇ゆうみ「此所このところへおの妻つまお美弥みやの隠かく
れ家がるゝお美弥みやの勇ゆうの来きる夜よも来こぬ夜よも酒さけの
支度しどと為なし下女げおよへ先さきへ寐ねさせ其身そのみへ寅刻やつひろ迄まで

臥床ふしどふいらず待まちて居ゐれを直ちふ酒さけの燭ろうをしく些ちと
の肴さかなを添そへ出だしける也い名な勇ゆうハ數す盃さいを傾くさけるがう一勇
酒さけハ百葉ひやくやくの長ちとハ斯かふ時ときふ飲のむの奴やつ言ことこのどら
漸おそこもそ胸むねが開ひらいて来きと去さ来あ前まへも一いつ盃さいのま
袷あはへう一美戴ひきませうう袷あはへ然ごとが前まへのひ一いつで大造さうざい醉まい
まま一勇醉まいとああひひどどが極樂ごくらくと世よの中なかハささううぬぬど
ふ飛鳥あすうがぶ川がわの淵瀨ふちせの變かり易やすきふ譬たとへて有あるとま
してしてやりり日ひの景况あきさまハ真事まことふ七色あやいろ蕃菽あまがしで辛からい

と思おもへば甘あまく成なるその時とき々の匙さ加か減げふハ困こまりき
る夫それを思おもふと飲のむべーサ此度こんどハ大おほきいの次つぎで
貫ぬきハう一美アレまア小ちひさいい方かたふーくお置お置きるさいいまーヨ
ヲと酌しやくを為なるがう一美アラヲ今日けふハ何なんどりか上うが誤多ごた
はくでハ有ありませんう一勇其事そのことヨ是これまで長州藩ちゆうしゅうはんが大
ささりふ威おどと振ふるつて居ゐるところが今日けふ急きんふ毛利けうり讚さん
岐守きまもり吉川きちがわ監物かんとく益田ますだ衛門ゑもんの三将さんしやうみて入數いれかずをひきさい
固こめて居ゐと堺町さかいまち御門ごもんの守護しゆごと免めんぜられとのふ

此件このけん又久三年八月十八日の事ことなり

彼の藩士はんしらが大小おほいふ是これと激怒いきどろるのそるらず七卿しちきやう

も又怒またどろとこまひ

此時このとき七卿しちきやうと称あやうせし三條黃門實美卿さんじやうわうもんじつみきやう（今の太

政大臣たうぢ）三條西中納言季知卿さんじやうにしなごんきちきやう 東久世少将ひがしきよせせうしやう 通禧とうし

卿きやう 四條侍從隆哥卿しじやうじぶらうりゆうかきやう 壬生修理大夫基修卿にぶせしゆりだうきしゆきやう 錦小

路おのり 右馬頭みぎうまがしら 賴德卿らいとくきやう 澤主水さわぬすみづ 正宜ただよし 喜よろこ なり

忍しの びくふ長州の藩士ちやうしやうはんしらが隊中たいちゆうへ加かえり給たまひ

容ゆる 子こ るれを堺町御門さかいまちごもんの會津桑名あいづさなとうの藩士はんし交

代しろ して是これと護衛ごゑいし我新撰組わがしんせんぐみるぞの者ものも事ことあら

を其應援そのおうえんを做するんと各戦おのづからひの准備しんびとして待まちかけ

今いまふも事起ことおこらんともる有様ありさまるを此後このちふ至いた

りて一いっ寸すんも隊中たいちゆうに離なれられぬ故土ゆゑのち方かたと頼たのみ

徐しゆと抜ぬくきさとい若わし事ことあつて此地このちが合戦くわせんの街まち

巷まちとるり砲声ぱうせい急いそふ鎮しんまらぬや或あるひの放火はうかるぞ

の為ためふ此住居このすまゐを焼やれりし豫よて話わしと置おき

たる通り粟田口の裏山とへて近江へいで石山の
観音を目あてふ聞往きりの隠れ家ふ容子を窺
ひ見たり我討死せしとふ評あらを速やうふ大藏
村へあり江戸へあり下るべし然とが合戦ふ其甚ど
浮説の多きその故人の話し我迂濶不信仰へる
しがと其も名へ僕が今下らるく死で仕舞と
折角の思ひで女房ありと人を表向の廣めもせ
ず置り往て仕舞なれば成らるいうと言ひ

お美弥の顔を見れお美弥もまゝ勇の顔と志
つと見詰て居とりしが愁然として溜息つき「イヤエ
若し合戦が始まつて貴君が討死でもなさる
様な事が有ると吾儕へ江戸へ参りません」
「何處へゆく一お後から追附冥土とやらのお
供を致しますから何卒連て往て下さいます」
「イヤ詰ら後事我言ふ折角の酒がり不落ちて
音くるし先々左様な時の相場ふ任せて置

として最一盃次を貫たう一夫でも貴君が若討
死者をうるんのと哀しい事と被仰からサ一貫ふ
左様夫でい去来合戦と聞えろ巴御前や班額
女の様ふ敵軍へ討て入り新撰組ふ女將軍あ
りと人の恐まるやうふして貫ひといが夫でい何
様ぞ一めんふ世間の人が大藏村で劍術と遣つ
二子の重六の様ふ弱いと直ふ出て苛い目ふ
遇してやりまねが祿工併貴君が連れて出てさへ

下さりやア掛替の砲や兵糧くらゐん擔いで往まねワ
悔しい祿工何卒ふ供を為せて下さいまうエ随分働
きますからサ一ヤ待巴御前や班額女の様ふ働い
て貫らゐ宜が和田義盛や浅利與市ふ生捕れ向
ふの者ふ為れちやア種すりごから銃砲擔ぎも兵
糧持も止して矢張自己とむり合戦と一々置
とと極て仕舞サ一オホい左様まると負續けて勝
こといかりも出来ません祿工一左様でも祿一人の家

近藤勇
子の
妻の
隠れ
家
来



詰り智恵の有るをうが上ふ立から仕舞ふの
自巳のとうが組伏られ尻ふ敷れて仕舞ふごらう
コレはア憎らしい何時吾情が尻ふ敷まうとエと勃ふ
あり勇の膝へ膝はき附て摺よれを勇の猪口を
持とる手と除一是サ浮山氣るる串戯と為ると酒
が翻えろつ一夫でも他の事と違ひ腹が立下り有
ませんうごらうせ笑ひ顔とあそ側へ来る氣遣ひ
ハ無いうら怒らして斯様ハ風ふ摺り寄せるの

謀計どアと口の内ふて唄ふ都々一用が有とて呼ど
ハ嘘よお顔見とさの計り事ハ美一らん小否る新撰組
のお頭さまどお人品ふ似あへるの意氣なる声を出し
たり女と焦すのがお上手ごうらう色男のお頭さま
おお役がへと成さぬキ一お前が惚てさ人呉れを
何役ふでも直ふ成のサ一此うへ最と惚とらう氣
が狂ッて仕舞升ごらう紐エと真面目ふるり勇の
顔とて居れば勇ハ莞示一篋ごらうめエ

○第廿四回

四條南の大芝居（下ろし）居（お）ての（を）江戸（えど）や大坂（おおさか）から登（のぼ）り役（やく）者（しや）の顔（かほ）揃（そろ）ひとく近來（ちかごろ）稀（まれ）る（る）當（あ）り（と）為（な）す（日）毎（び）日（び）運（た）ぶ人（ひと）の足（あし）人（ひと）の山（やま）る（る）す大入（おほいり）の（を）得（と）都（みやこ）會（あひ）の花（はな）みりけり爰（こゝ）ふ小常（こつね）の（を）一（ひと）群（ぐん）の田原屋（とらや）清兵衛（せいべゑ）が長門（ながと）へ下（くだ）る心（こゝろ）の暇（いとま）乞（ご）の留（とど）別（わか）る（り）と（し）知ら（し）ず一（ひと）時（とき）の奢（おほ）りと思（おも）ふも（も）又（また）今日（けふ）は晴（は）着（ぎ）の伊達（だて）衣（い）裳（しやう）髪（かみ）の飾（かざ）りも花（はな）美（み）やう（う）小粧（こまげ）ひとく朝（あ）ま（さ）き（き）より

出（で）うけ来（き）り（し）芝居（しばい）茶屋（ちや）江戸屋（えどや）の二階（にがい）此家（このや）の兼（かね）て田原屋（とらや）の恃（た）とほけ（る）れ（を）只（ただ）さへ扱（あ）ひ（の）鄭重（ていじゆう）る（る）と清兵衛（せいべゑ）ふ託（たく）さ（を）此日（このひ）の事（こと）引請居（ひきうけあ）を（を）終屋寅吉（しゆうゑんきち）が（を）う（ら）ひ（ふ）く土産（とさん）纏頭（ちんとう）も行届（いきとど）く（ふ）亭主（ていしゆう）へ元（もと）より下婢料理場（かひれうりば）送り迎（むか）ひ（の）若（わ）い者（もの）ら（が）世辞（せし）輕薄（けいぱく）の（を）厚（あ）さ（の）黄金（こがね）の利益（りやく）と知（し）られ（る）たり（若）者（もの）今日（けふ）は宜（よろ）う（と）出（い）ま（す）と何（なに）やら世間（せけん）の混雜（こんざ）を（を）一（ひと）で（を）あ（ま）す（れ）が（る）ア仕合（しあ）る（と）ふ（の）今度（こんど）も

まゝ大景氣おんけいきに棧敷土間さたきどまへ猶なほさう簾引船すずひきぶねまでも
毛氈けせんのわくる程ほども定まこと不骨ふねが折おれまゝこれど外あつさ
まちがと違ちがひ御具ごひのき負厚あつい横田よこたさ々の事ことなれを稍やう
く上等じやうじやうの場ばと取とりまゝと只今さきま御案内ごあんいた
まいんと言いふうち出い出す茶草煙ちやそうえん盆ぼん小常こつねの常つね番ばん
づると帯おびるどムかへ支度しどと居おる程ほどもなく
迎むかひふ来きる茶屋ちややの男をとこふ連れられく各棧敷おんけいき
へ到いたりけり此この時とき寅吉とらきちの用よう不ふ佞托うごけあと不ふ残のこり

が小常こつねらが忙いそ々いと足元あしもと世話せわしく芝居しばいの木戸きどと這また
入いり往むかひ後影ごうげ見みおくりて一人ひとり何なにやら點頭ちんとう一寸買か
ひのを為なして来きるとして茶屋ちややと出いで急いそぎ此裏町このうらまちふ
住すむ目明めあり玄藏げんざうの家うちへ到いたり門かど口ぐちあけて首くびさ入い
れ親方おやうのお内うちり子こと言いはば玄藏げんざうの火鉢ひたちのそむ居す
つゝおて寅とらさんう上あんるせへ寅自おの己のア留る守すうと
思おもつて案事あんじて来きとが占しめとくと言いひるがう上あり込こ
と「此この二三日ふたみかへ猶なほ々い騒さわ々いいとの評判ひやうはんどの不ふ能よく

居みとるアア今いままでハ西風やまぜが強つよいので自己おのりちも尻しつ
尾びを巻まき成なりり丈とけ其鼻息そのなまいきを除よけく居おとが此程このほど
不ふ到とり攘夷ちやういどの鎖港さこうどのと言いふてハ當時とうじの世せ
界かいの景況あうさまでハ迎むかへ出で来きぬ譯わけが関白せんぱくさぬと始はじめ
諸卿方しよけいがたへ知しれとので又東風とうふうハ吹ふかへーさーも今いま
まで勢いきほひと張ちて居おと長州ちやうしゅうの三大将しちやうりやう毛利まうり讃岐守さぬきのりやう
をトめ拵しなのての者もの一同どうが堺町御門さかいまちごもんのち固くめと
上あられると三條さんじょうさぬ其餘そのよの六卿りくけいが此人數このあんとと一ひと

巻六下十五

ウう成なりりての大怒おほこり夫お附つちやア勤王きんおうと名なと
て世よの中ちゆうに騒さわがすこゝ共ともを盡つくく縛くわめ捕とく仕し
舞まいとの守も護ご職しやく會津えつしん侯こうや所司代しよしよだい桑名さうな名な侯こうの御下おんげ
知ちみより自己おのりとちのお頭くちらとを町奉行まちぶぎやうハ元もとより
見廻みまわり組ぐみでも新撰組しんせんぐみでもてみてと盡つくす最中さいちゆうど
から今朝けさらア安閑あんかんとして内うちふやア居おられ移うつへのご
がお前まへから言い込こんど話わの奴やつこさんがいよく出掛でかけく
来きとる何様なにかで有あらうと思おもひ待まちて居おとるどア左ひだり

様であつと開りやア氣の毒るありー小常の連
中へかねて話しと通り自己が今日の総奉行ど
から誘ひ出して首尾よく芝居へ嵌こんで来と
グ肝心の横印へ自分のむれの火のてグ弱く成
とのふ恐いのう何程煽動かけ勸めく見ても中
く出かける景色みる事ふ因と自己が往ても隠
れて遇ねとが有から何でも一目論見あらうう
知れぬへと察しとちぬ一寸その訳と尚話し相

引出す工夫ふ仕組うからお前へ早く茶屋へか
へり小常の番を為く居候へ午刻過ぎまでおや
必ず方と附ると聞き寅吉へ打點頭一夫ぢやア旨
く遣て見て呉んぬへ今日の様る首尾へまこと
再とび無のどかろサへまぐと承知の介どから摸
様の附と待て居るせへ寅一夫あう玄さんドレ番人
と為く居やううト尻引かろげく帰り往へ玄藏
へ後見おくり一ホニ毫と野郎ぢやア後人ういくら

彼奴が横田の女房のな岩とやらふ惚て居る横
田を此方人らふ搦揚げさせとつて誰があんる奴
の言と我聞りのう然ハ笑ふりの寅吉のやうな
南ふ野郎があれべこそ此方人らの錢儲のては
きも附と言ふものドレ一走り往て來やうと言ひ
つ續いて出うけたり

○却説芝居ハおひくハ幕移るほど人込て小常
ハ逆上耐られぬハ暫時その炎熱を醒さんと

幕の間を抜てきと江戸屋の二階の奥の間の椽
のて摺ふ身とよせうけ風ふ吹れるが清兵衛
が容子の此ほど別して常ならぬと何様と事
と考えの思案ふ沈と居る折あつ階子の段
と踏らら上り來る寅吉ふと夫ふ引添ふ二
りの武士小常の座敷へ入り來る寅吉ハ武士ふ
會釋一と小常ふむくハ「おの旦那がとハ清兵
衛さんと豫く御具負ふなさる方々みてお前

不^{ちつと}些^{との}恃^ととたいとや有^{ある}と被^{あつ}仰^{やう}くお出^{いで}ふ成^{なり}とちる
 御^{おん}案内^のと申^{まう}したのどと言^いれ小^こ常^ねの小^こ首^{くび}と傾^{かたむ}け
 り居^まり直^なりて身^みを向^むけとり

春雨文庫第六編卷之下 終



太^{おほ}真^{まこと}遺^い傳^{でん}
 精^{せい}製^{せい}桐^{とう}の箱^{はこ}入^い
 上^{かみ}處^{ところ}女^に香^{かう}
 一^{ひと}廻^{まわ}り

ともく... 御^{おん}案内^のと申^{まう}したのどと言^いれ小^こ常^ねの小^こ首^{くび}と傾^{かたむ}け
 り居^まり直^なりて身^みを向^むけとり

所弘賣

色自然と福のどくあり二早月ひかりの格不流意の机用
...
為永春水精削

妙業初みゆる

書物英繪入讀本所
江戸京橋路左門町東側中程
文永堂 大嶋屋傳右衛門

開明小説

春雨文庫

第四編ヨリ 近世の烈婦孝女乃傳説を
引續き出版 記し面白き珍書あり

松村春輔編輯
復古夢物語

初編ヨリ 八編マデ 出版

連ハ明治太平記の前篇ありて壽永
六年亞米利加使節相州浦賀へ來舶
以來明治元年伏見戦争迄委し
たる面白き書也

和田定節編輯
參考鹿兒島新誌

半紙本 初篇ヨリ七篇 迄全部十五冊

此書西国征討の始末を詳細に
おもむき第一の實録あり

東京書肆

大島屋

武田傳右衛門

弥生門町上二番地

